

教育相談通信

SWEET FISH



誰かのことを想って

徳島県立那賀高等学校

教育相談課

(令和3年3月24日(水)発行)

3学期も、コロナ禍における「新しい生活様式」のもと、生徒の皆さんには日々の検温・マスクの着用・手指の消毒・教室の換気等、新型コロナウイルス感染予防対策に協力していただきました。社会の一員として、自分にできることや課されたことを誠実に実行し、共に生きる周囲の人々への思いやりの心を持って生活することの大切さを実感する日々でもありました。学年末は、今年度を振り返るとともに次年度の計画を立て、決意を新たにする大切な時期でもあります。皆さんにとって、この1年間は充実していましたか。今年度最後の「教育相談通信」は、教育相談課員5名からの那賀高校生へのメッセージを掲載しています。ぜひじっくりと目を通していただき、心が通い合うことを期待しています。令和3年度も、目標に向かって努力を積み重ね、夢の実現に向けて前進していきましょう。

祖父江 功昌

早いもので、那賀高校に赴任して5年が経とうとしている。同じ年に開設された森林クリエイト科も5年目を迎え、今年は3期生がそれぞれの進路に巣立っていった。卒業生の中には、那賀町で林業関係で活躍する生徒も多くおり、会う度に成長していく姿に頼もしさを感じ、自分も頑張らねばと励まされる。そして、それぞれの職場の方から「頑張っていますよ」という言葉をいただく度に、那賀高校は本当に地域の方々に支えられているなとつくづく実感する。

那賀高校では、弓道部の顧問になり、鈴木泰仁師範から弓道を教えていただいたことも大きな財産となっている。文字どおり、四十の手習いで始めたのであるが、技術だけでなく、自分の内面と向き合うことの大切さ、人への配慮や他者を尊重する心、何より自然と謙虚に向き合う姿勢は、林業と通じるところがあり、自分の未熟さを痛感する日々である。今年は、新型コロナウイルスの影響で県高校総体も開催されず、部員には悔しい思いをさせてしまった。しかし、練習ができない期間が長く、先の見えない状況の中でも、生徒たちはあきらめることなく、代替大会まで全員が部活動を続けてくれた。本人たちの努力はもちろんであるが、ご家族や、鈴木師範をはじめとする地域の方の支えが大きな力となったことは間違いない。このように、那賀町には自然と人に囲まれて、高校生から社会人として成長し、自分の足で歩いていく力を培う場所として、本当に素晴らしい教育資源がある。新型コロナウイルスの影響はまだまだ続くと思われるが、生徒の皆さんにもぜひ、那賀高校で様々なことに挑戦して欲しい。

川平 伸也

「人はそれぞれ事情をかかえ、平然と生きている」作家伊集院静氏の言葉である。彼は若くして弟さんを亡くしただけではなく、前妻である女優の夏目雅子さんを白血病で失っている。辛いことや悲しみを乗り越えていこうとする自身の経験からの言葉であり、また他の人も、それぞれ言えぬ問題をかかえ、辛い状況を歯を食いしばって、平気なフリをしながら生きているといった人間の生き様を表している言葉である。つまり、辛いのは自分1人では決してなく、もっと辛い状況に置かれている人は、たくさんいるということである。みなさんも、それぞれにしんどいことはあると思うが、耐えてほしいし乗り越えてほしい。そして自分以外の他の人も何か問題をかかえながら頑張っている存在であることに気づき、大切に寄り添いながら接してほしい。

東日本大震災から10年が経ち、節目にあたりさまざまな特集がテレビや新聞紙上で紹介されている。そこには、まだ癒えぬ傷をかかえ、忘れようにも忘れられない悲しみを胸に懸命に生きる被災者の姿がある。私たちに想像もできない10年間を過ごしてこられた方々。そしてこれからも、それは続き、それでも前を向いて生きてく人々がい

ることを忘れてはならない。

「人はそれぞれ事情をかかえ、平然と生きている」

西沢 幸恵

野球人イチローは、「壁というのは、できる人にしかやっこない。超えられる可能性がある人にしかやっこない。だから壁があるときはチャンスだと思っている。」と言っています。皆さんの目の前には壁はありますか？それは大きく立ち塞がる壁ですか？目の前の壁が大きければ大きいほど超えられるのか不安になりますが、超えたときの達成感は何えようがないほど素晴らしいものです。力強く立ち、一生懸命に挑戦し、目の前の壁を超えてチャンスをつかみ取ってください。応援しています。ちなみに、私は壁を超えるというよりも体当たりで壊しております…。

篠原 嘉恵

去る3月1日、無事に卒業証書授与式が行われ、62名の卒業生が那賀高校を巣立っていきました。新型コロナウイルス感染症の影響が懸念されましたが、万全の対策の下で、心温まる素晴らしい式が執り行われたことを嬉しく思います。今年度を振り返ってみると、臨時休業に始まり何かと変化の多い1年でしたが、そのような状況だからこそ、「節目」を意識して過ごすことができました。始業式や終業式といった行事を大切にするのももちろんですが、年中行事や季節のイベントを取り上げ、クラスで掲示物を作成したり、ささやかですがパーティーを開いたりしました。何もなくても節目の日はやってきますが、その日に向けてあれこれと準備をすることで、心の準備も整うのだと感じています。皆さんの人生にも、たくさん節目が待っていると思いますが、その一つ一つを大切にできるように、日頃から心がけてみてください。

中川 千秋

東日本大震災から今年で10年目となります。先日の3月7日(日)に、NHKの報道番組で震災10年特集をしていました。「10年たった今だから～会えないあなたを抱き続けて～」というテーマでした。心揺さぶられる内容でしたので、皆さんに紹介したいと思います。

被災者の阿部直安さんは、愛する妻の麗子さんを震災で亡くされ、失意のどん底にあり、喪失感からひきこもりとなっていました。そのような時に、ある1人の画家との出会いがありました。「面影画」を描く黒沢さんという男性です。黒沢さんは、震災で亡くなられた128名もの面影画を、温かい言葉も添えてボランティアで描かれました。黒沢さん曰く「依頼者である遺族の方と、とことん対話して、亡くなられた方の人柄や生きざまを理解しないと面影画は描けない。」ということで、生きる気力を失くしていた阿部さんとも時間をかけて向き合い、麗子さんの面影画を完成させました。

阿部さん夫婦は旅行が好きで、よく2人で気の向くままに旅をしていたそうです。そこで阿部さんは、黒沢さんの勧めもあり、麗子さんの遺影を助手席に乗せて話しかけながら、10年かけて思い出をたどる慰霊の旅を続けました。「2人の思い出はもうつくれないが、妻を思い出してあげることが大事。すると、リアルに妻がそこにいる、供養になる。」と思えるようになったそうです。阿部さんはこの旅を通して、亡くなった妻と向き合うと同時に、妻の自分に対する思いを想像することができ、死を受け入れることで「負けないように、とにかく今から生きていく。」と、前向きな心を取り戻したのです。

また阿部さんは、近所の山脇さんという住職さんにも心の内を相談していたそうです。画家の黒沢さんや住職さんから、人の心に寄り添うことの意味や相談することで変わる自分があることを、テレビを見ていて再確認することができました。

さらに、このような話が紹介されていました。震災後の避難所で、泣きじゃくる2歳の息子にアメキャラメルをくれた老夫婦を探しているという男性です。現在12歳になった息子を前にして「大げさかもしれないけれど、あの時のアメキャラメルで、今の息子がいる。」と。父親として、10年経った今も受けた恩を忘れず、感謝の気持ちを伝えたいという親心に感動を覚えました。

今を生きる私たちは、世の中の出来事を他人事として流してしまうのではなく、自分事として考え、周りの人々の心を理解するよう努め、支え合い、共生社会を築く責任があるのだと感じています。